2016年『あきぎり』現代語訳

（尼上八）まことに限りとおぼえ給へば、御乳母を
（尼上は）　本当に臨終だと思いなさったので、　乳母を

召して、「今は限りとおぼゆるに、この姫君の
お呼び寄せになり、「今となってはもう最期と思われると、　この姫君の

ことのみ思ふを、ア なからむあとにも、かまへて軽々
ことだけ心配なので、　（自分が）亡くなった後にも、　必ず（姫君を）軽々しく

しからずもてなし奉れ。今は宰相よりほかは、誰を
お世話し申し上げてはいけませんよ。　今となっては（姫君は）宰相（＝乳母）の他は、誰を

か頼み給はむ。
頼りにしなさるでしょうか。いや、他の誰も頼りにはしなさらないでしょう。

我なくなるとも、父君生きてましまさば、さりとも
たとえ私が亡くなっても、　もし父君が生きていらっしゃったならば、そうはいっても（姫君は大丈

と心安かるべきに、誰に見譲るともなくて、消えな
夫だろう）と安心できるに違いないのに、誰に世話を依頼するということもなくて、　亡くなって

むのちのうしろめたさ」を返す返すも続けやり給は
しまうような後の不安なこと」を　繰り返し繰り返し仰るものの、話し続けて最後まで

ず、御涙もとどめがたし。
仰ることが出来ず、涙もこらえるのが難しい。

まして宰相はせきかねたる気色にて、しばしは
まして乳母は涙をこらえるのができないでいる様子で、　しばらくは

ものも申さず。ややためらひて、「いかでかおろか
何も申し上げない。　少し心を落ち着けて、「どうして（姫君のお世話が）いい加減になるでし

なるべき。イ おはします時こそ、おのづから立ち去る
ようか。いや、いい加減なお世話なんてしません。（尼上が）御存命の時には、たまたま（姫様のそばを）

ことも侍らめ、誰を頼みてか、かたときも世に
離れることもあるでしょうけれども、誰を頼りとして、ちょっとの間でもこの世に生き続けなさることが

ながらへさせ給ふべき」とて、袖を顔に押し当て

できるでしょうか。いや、私以外を頼りにして生きることはできないでしょう」と言って、袖を顔に押し当

て、たへがたげなり。姫君は、ましてただ同じさま

てて、（涙を止めるのが）堪えがたそうである。姫君は（乳母にも）まして、ひたすら同じ（涙を止めるの

なるにも、かく嘆きをほのかに聞くにも、なほもの

が堪えがたい）様子であるなかにも、このように嘆きをかすかに聞くにつけても、「まだ正気を保って

のおぼゆるにやと、悲しさやらむかたなし。げに

いるのだろうか」と、悲しさを晴らす方法はない。本当に、

ただ今は限りと思して、念仏高声に申し給ひて、

ただ今となってはもう最期だと思って、念仏を声高く申し上げなさって、（周囲の人が、尼上は）

眠り給ふにやと見るに、はや御息も絶えにけり。

「眠りなさるのだろうか」と見ると、早くも息絶えてしまった。

姫君は、ただ同じさまにと、こがれ給へども、

姫君は、（尼上と）ひたすら同じように（死んでしまいたい）と、思い焦がれなさるけれども、

かひなし。誰も心も心ならずながら、さてもある

どうしようもない。誰もが気が気でないけれども、そのままの状態でいることも

べきことならねば、その御出で立ちし給ふにも、

できないので、その御葬送の準備をなさるにつけても、（姫君が）

われさきにと絶え入り絶え入りし給ふを、「何事も

「我が（尼上より）先に（死にたい）」と言って何度も気を失いなさるのを、（姫君の傍にいる人が）「何

しかるべき御ことこそましますらめ。消え果て給ひ

事も前世からの因縁がおありになるのだろう。（尼上が）お亡くなりになって

ぬるは、いかがせむ」とて、またこの君の御あり

しまったのは、どうしようもない」と言って、またこの姫君のご様子を

さまを嘆きゐたり。大殿もやうやうに申し慰め給へ

嘆いている。大殿も様々に申し上げて（姫君を）慰めなさるけれども、

ども、生きたる人とも見え給はず。

（姫君は）生きている人とも見えなさらない（ほど茫然としている）。

その夜、やがて阿弥陀の峰といふ所にをさめ
その夜、　そのまま阿弥陀の峰という所に（尼上の遺体を）埋葬し申し上げる。
奉る。むなしき煙と立ちのぼり給ひぬ。エ悲しとも、
（尼上は）はかない煙となって立ち上りなさった。　悲しいという言葉でも、
世の常なり。大殿は、こまごまものなどのたまへる
月並み過ぎて気持ちを言い尽くせない。大殿は（尼上が生前に）細かくおっしゃったことが
こと、夢のやうにおぼえて、姫君の御心地、さこそ
夢のように思われて、　姫君のお気持ちは、「さぞかし（悲しいだろう）」
とおしはかられて、御乳母を召して、「かまへて
と自然と推し量られて、　乳母を呼び寄せて、　「必ず（姫君に何か）
申し慰め奉れ。御忌み離れなば、オやがて迎へ奉る
申し上げて慰め申し上げなさい。喪が明けたら、　すぐに（姫君を）迎え申し上げ
べし。心ほそからでおはしませ」など、頼もしげに
よう。　心細く思わないでいらっしゃい。」など、　頼もしい様子で
のたまひおき、帰り給ひぬ。
言い残しなさって、　お帰りになった。
中将は、かくと聞き給ひて、姫君の御嘆き思ひ
中将は、　「このよう（な事情）だ」と聞きなさって、姫君のお嘆きを想像し、
やり、心苦しくて、鳥辺野の草とも、さこそ思し
気の毒で、「『鳥辺野の草となって（自分も燃やされて尼上と一緒に煙になりたい）』とも
嘆くらめと、あはれなり。
（思って）、さぞかし嘆きなさっているだろう」と（思うと、中将も）しみじみとつらい。
夜な夜なの通ひ路も、今はあるまじきにやと思す
「（自分が）毎晩（姫君の元に）通っていくことも、「（喪中となった）今はもうできないのだろうか」と
ぞ、いづれの御嘆きにも劣らざりける。少将のもと
お思いになると、どなたのお嘆きにも劣らない（ほど嘆く）のであった。少将（＝姫君の侍女）のもとまで
まで、
（姫君宛の手紙を送った）、

カ鳥辺野の夜半（よわ）の煙に立ちおくれ
（火葬地である）鳥辺野の夜更けの煙（となって空に上がる尼上）に取り残されて、
さこそは君が悲しかるらめ
さぞかしあなたが悲しんでいることでしょう。
とあれども、キ御覧じだに入れねば、かひなくてうち置きたり。
と書いてあるけれども、（姫君は）目をとめることさえなさらないので、（少将は）どうしようもなくて（手紙を）置いておいた。